

親の発達と子育て意識

— 父親と母親の比較 —

Parent Development and Parental Feelings about Child-rearing
— A Comparison between Fathers and Mothers —

肥 後 功 一
Koichi HIGO

要 旨

子どもを保育所に預けて働く保護者が、「親として」どのような変化を自身に感じながら、どのような「育児の意識や態度」で子どもに向かおうとしているのかを、大まかにスケッチすることを目的として質問紙による調査研究を行った。父親と母親とのちがいをみていくと同時に、夫婦という対の関係が彼らの「変化」の感覚や子育ての意識に反映されると考えて分析を行ったところ、主として母親の発達や子育て意識への影響が示唆される結果となった。

キーワード

親としての発達、育児の意識・態度、両親のズレ、父親の育児参加

I はじめに

平成8年度に策定された島根県版エンゼルプラン¹⁾は平成17年度までの10か年計画であるが、国が緊急保育対策等5か年事業として掲げた事業²⁾については平成12年度を目標年次としている。具体的には低年齢児保育、延長保育、一時保育、地域子育て支援センター、多機能化保育所整備、放課後児童クラブ、乳幼児健康支援サービスである。

平成10年度は、この数値目標を伴う事業のちょうど折り返し点ということになるが、すでに数値目標を達成した事業（たとえば低年齢児保育、一時保育）もあれば、まだ到達しないもの（たとえば延長保育、放課後児童クラブなど）もある。

筆者は県版エンゼルプランの策定に反映させるために島根県保育協議会が県下の認可保育所に対して行ったアンケート調査の分析に関わる機会があり、以来、保育所で起きようとしている保護者と保育者のコミュニケーション障害について事例収集を行ってきた。また近年、幼稚園における子育て支援として「教育課程にかかる教育時間の終了後に希望する者を対象に行う教育活動」³⁾や「預かり保育」が実施され、こうした保育現場における保護者と保育者とのコミュニケーションに関わるエピソードの収集・分析も行ってきた（肥後 1997）。たしかに保護者の意識の変化を感じる機会が多い。けれどもそれはかなり多様な次元を含んでおり、「保護者」という語で括り全体的な傾向を指摘することは到底困難であると思われるし、それが意味

・ 島根大学教育学部心理学研究室

のあることとも思われない。むしろどのような意味での多様性をもっており、どのような方向性を「育児」というコミュニケーションに反映させようとしているのか、その背景にはどのような要因があるのかを探索していくことに意味があるように思われる。

本研究では保護者が「親として」どのような変化を自身に感じながら、どのような「育児の意識や態度」で子どもに向かおうとしているのかを、関連研究を参考に作成された質問紙による調査資料を通じて大まかにスケッチすることを目的としている。この際、父親の意識と母親の意識、およびそのズレということを分析の一視点にしたいと考えた。

II 方法⁴⁾

調査対象：松江市近郊の2保育所の保護者に対し、保育所を通じて1家庭2部（父親用・母親用）⁶⁾の調査用紙を配布し、約1週間後に回収した（提出時は無記名で専用の封筒に父親用・母親用の2部をいっしょに封入）。総回収数242通で、うち夫婦ともに回答の得られた112組（224通）について、今回の分析の対象とした。

このうち核家族は37家庭（33.0%）で、あとは何らかの形で祖父母同居であった。また子ども数は一人っ子が25家庭（22.3%）、二人が49家庭（43.8%）、三人以上が38家庭（33.9%）であった。子どもの性別は男児のみが30家庭（26.8%）、女児のみが31家庭（27.7%）、男女混合が51家庭（45.5%）であった。父親の年齢は22才から50才までの範囲で平均年齢は35.2才（標準偏差5.15）、母親の年齢は24才から45才までの範囲で平均年齢は32.6才（標準偏差4.10）であった。

後に父親、母親それぞれの年齢群ごとの回答傾向の違いを検討するため、それぞれの平均年齢±.5標準偏差を「年齢群2」として、それ未満を「年齢群1」、それを越えるものを「年齢群3」とした。その結果、父親における各年齢群の平均年齢は、年齢群1=29.3才（32人）、年齢群2=34.9才（45人）、年齢群3=40.9才（35人）、母親の場合は年齢未記入者2名を除き、年齢群1=28.2才（37人）、年齢群2=32.6才（38人）、年齢群3=37.3才（35人）となった。

調査内容：質問紙は次のA～Dの4つの項目群により構成された。

A. 「父親として」「夫として」の役割

父親に対して、自分自身を「父親として」また「夫として」どのくらいに自己評価するのかをたずねた。評価方法は一般にわかりやすいと思われる100点満点による自己採点とした。母親に対しては、配偶者（夫）を同様に「父親として」「夫として」評価することを求めた。

B. 父親の家事育児への参加

原（1993）、荒木（1998）⁶⁾などを参考に10項目を選び、ほとんどしていない(1)、少ししている(2)、よくしている(3)の3件法で評価を求めた。10項目中、子育てに関わる項目は「子どもといっしょにお風呂に入る」「子どもを寝かしつける」「子どもと一緒に外出したり遊んだりする」「忙しいときでも、なるべく子どもの話し相手になる」の4項目、家事参加に関する項目は「頼まれて買い物に行く」「洗濯物の取り入れをする」「ごみ出しをする」「食後の皿洗いをする」の4項目、また保育所に関わるものとして「保育所の送り迎えをする」「保育所行事や保護者会に参加する」の2項目を加えた。父親に対してはこれらの項目をどのくらいしているかを、また母親に対してはこれらの項目を配偶者（夫）がどれくらいしているかを評価するよう求め

た。

C. 親としての発達

柏木・若松（1994）の用いた50項目から彼らの抽出した各因子（6因子）を代表するような35項目を選び出して用いた。評定は、全く以前と変わらない(1)～かなり変わったと思う(4)の4件法によった。

D. 子どもに対する意識・態度

大野・柏木（1992）の用いた28項目から彼らの抽出した各因子（5因子）を代表するような19項目を選び出して用いた。評定は、全くそうは思わない(1)～そう思う(4)の4件法によった。

III 結果と考察

1. 「父親として、夫として」の役割評価に関する検討

父親に対して、「父親として」の自己採点、また「夫として」の自己採点を求めた。いずれも一般になじみのある方法として100点満点による評点を求めた。一方、母親に対しては、配偶者を「父親として」「夫として」どのように評価するか、同様に100点満点での評価を求めた。父親全体の「父親として」の自己採点の平均値は62.5（標準偏差21.79）、「夫として」は59.8（同23.35）であった。一方、母親による評価では「父親として」の平均値は74.5（標準偏差19.14）、「夫として」は73.9（同18.30）で、いずれの役割に対しても父親による自己評価をやや上回る「甘い」評点であった⁷⁾。

これらの4組の評点間の相関はいずれも有意であったが、とりわけ、父親による2つの自己評価間（.79）、母親による2つの役割評価間（.66）の2組の相関は高かった。父親においても母親においても、全体としては「父親としての評価」が高ければ「夫としての評価」も高く、その逆も成り立つということになる。しかし、母親の場合の方が、父親の場合よりもこの2つの評価の相関はやや低くなっており、母親においては父親よりも敏感に2つの「役割」間の差異をとらえ、評価しているといえるかもしれない。

また「父親として」の役割に対する、父親の自己評価と母親の夫評価との相関は.41、同様に「夫として」の役割に対する両者の評定値の相関は.39で、夫婦間での評価がある程度一致している場合とそうでない場合があることが予想された。そこで、2つの「役割」に対する父親と母親による評価のズレを検討するために、まず4組の評点をそれぞれ標準化し、表1のように群を構成した。「父親意識」および「夫意識」の2群は、それぞれの「役割」に対する父親自身による自己評定の高低である。これに対して「父親評価」および「夫評価」の2群は、「父親」「夫」というそれぞれの「役割」を配偶者である夫がどの程度果たしていると感じているか、についての母親（妻）の印象であり、ある意味では子育てや育児に対する母親の被サポート感を表しているかもしれない。さらに「父役割」および「夫役割」の3群は、「父親」「夫」という2つの役割に対する、父親と母親の評定のズレから構成されており、「上方ズレ群」は父親の自己評定が母親の評価よりも相対的に高い群、「一致群」は夫婦の評価がほぼ一致（双方の標準化された評定値のズレが±.5の範囲）している群、「下方ズレ群」は父親の自己評定が母親の評価よりも相対的に低い群である⁸⁾。以下、全体の質問項目の分析において、これらの群ごとの差の有無を検討していきたい。

表1 父親、母親による役割評価に基づく群構成*

群の名称		群の人数	群構成の基準
父親意識	H 群	35	父親による「父親として」の自己評価(標準得点)が(平均値+.5標準偏差)を越える者
父親意識	L 群	39	同上の値が(平均値-.5標準偏差)未満の者
夫意識	H 群	35	父親による「夫として」の自己評価(標準得点)が(平均値+.5標準偏差)を越える者
夫意識	L 群	17	同上の値が(平均値-.5標準偏差)未満の者
父親評価	H 群	34	母親による夫の「父親として」の評価(標準得点)が(平均値+.5標準偏差)を越える者
父親評価	L 群	29	同上の値が(平均値-.5標準偏差)未満の者
夫評価	H 群	30	母親による夫の「夫として」の評価(標準得点)が(平均値+.5標準偏差)を越える者
夫評価	L 群	27	同上の値が(平均値+.5標準偏差)未満の者
父役割	上方ズレ群	38	「父親として」の父親による自己評価(標準得点)から母親による評価(標準得点)を引いた値が+.5を越える夫婦
父役割	一致群	36	同上の値が±.5以内の夫婦
父役割	下方ズレ群	36	同上の値が±.5未満の夫婦
夫役割	上方ズレ群	39	「夫として」の父親による自己評価(標準得点)から母親による評価(標準得点)を引いた値が+.5を越える夫婦
夫役割	一致群	34	同上の値が±.5以内の夫婦
夫役割	下方ズレ群	37	同上の値が±.5未満の夫婦

(欠測値のため各群構成の合計人数は110となる場合がある)

2. 「父親の子育て・家事参加」に関する検討

(1) 全体としての傾向

父親に対して子育て・家事への実際の参加状況を問うた10項目に対する自己評点を、子どもへの関わり、家事参加、保育所関係という3つの領域ごとに集計し平均値を求めた(以下「家事育児参加得点」と呼ぶ)。また母親に対しては、同じ10項目の家事育児への夫の参加状況を評価するよう求めたので、これらを用いて父親の場合と同様、3つの領域ごとの平均値を求めた(父親に対する評価を意味するので、以下「家事育児参加評点」と呼ぶ)。

父親の家事育児参加得点の平均値は、子どもに関わること(育児)が最も高く(2.10)、次いで保育所関係(1.86)、家事(1.56)の順となった。母親の父親に対する家事育児参加評点の平均値も同じ順であった(それぞれ2.17、1.89、1.61)。また父親の家事育児参加得点と母親による家事育児参加評点との相関は、子どもへの関わり、家事参加、保育所関係の順に、.63、.56、.50(いずれも $p < .01$)であった。

(2) 関連する要因

ここで扱った10項目は、項目数としては不十分であるが、父親の実際の家事育児行動についてある程度のスクリーニングが可能と考え、代表的な項目を取り上げて検討してみたものである。父親自身の年齢や家族構成等によるちがいが予想されるところであるが、父親の年齢群、母親の年齢群、家族構成、子供の数、子どもの性別、の5つの要因による父親の3つの家事育児参加得点の群間差はいずれも有意ではなかった。

表2は父親の家事育児参加得点を、父親自身による「父親として」の自己採点および「夫として」の自己採点の高低で比較したものである。二つの役割意識の高低が、実際の「子育てへの

関わり」や「家事参加」の自己評点の高低と有意に関連していることがわかる。「保育所関係」では有意な関連がみられなかった。保育所の送り迎えなどは、当人の役割評価（意識）の高低とはある程度無関係に、「しなければならないこと」として定着していると考えられる。これに対して表3は母親による家事育児参加評点で同様の検討を行った結果である。家事参加に対する母親の評点が、父親自身の「夫役割」の意識の高低とではなく、むしろ「父役割」意識の高低と関連している点が興味深い。

表2 家事育児参加得点（父親）の群ごとの平均値

	父親意識			夫意識		
	L群	H群	有意差	L群	H群	有意差
子どもへの関わり	1.78	2.31	※※	1.78	2.24	※※
家事参加	1.40	1.64	※	1.34	1.71	※※
保育所関係	1.71	1.96	NS	1.65	1.97	NS

(※… $p < .05$, ※※… $p < .01$, NS… $p \geq .05$)

表3 家事育児参加評点（母親）の群ごとの平均値

	父親意識			夫意識		
	L群	H群	有意差	L群	H群	有意差
子どもへの関わり	1.89	2.34	※※	1.97	2.37	※※
家事参加	1.37	1.65	※※	1.48	1.80	NS
保育所関係	1.76	1.93	NS	1.79	2.06	NS

(※※… $p < .01$, NS… $p \geq .05$)

3. 「親としての発達」に関する検討

(1) 35項目の因子分析結果

父親、母親それぞれについて因子分析（主因子法）を行った。父親については固有値1.0以上の大きさをもつ因子が6つ抽出されたが、第1因子の固有値が15.72（寄与率45%）と圧倒的に大きく、かつ全項目がこの因子上に高い因子負荷量を示したことから、1因子構造と解釈された。

母親の場合は、同様に固有値1.0以上の因子が6つ抽出されたが、各因子上にまとまる項目の意味内容がある程度解釈可能であったため6因子解を採用した。表4にバリマックス回転後の各項目の因子負荷量を示した。各因子とも柏木・若松（1994）の6因子構造における項目の組み合わせとはかなり異なっており、因子1以下それぞれ「協調的な生き方」、「外界や自身への関心」、「情緒的な絆の意識」、「運命などの受容」、「対人技能の発達」、「前向きに生きる意欲」と新たに命名された。

(2) 項目得点による検討

父親については1因子構造であると解釈されたが、項目相関（その項目とその項目を除いた全体との相関）を見たところ、35項目すべてについて、.43～.80の範囲で有意な相関であったため、35項目の平均評定値を父親の「親としての発達」についての項目得点とした。また母親については各因子上にまとまった項目の平均評定値を算出し、6つの項目得点とした。

表4 「親としての発達35項目」(母親) のバリマックス回転後の因子負荷量

項目 番号	質 問 項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
2	他人の迷惑にならないように心がけるようになった	.72	.18	.18	.04	.07	-.10
16	常識やしきたりを考えるようになった	.71	.07	.24	-.01	-.10	.04
14	他人の立場や気持ちをくみとるようになった	.67	.14	.09	-.09	.36	-.04
27	協力することの大切さが分かるようになった	.64	.05	.16	.06	.21	.31
15	一人ひとりがかげがえのない存在だと思ふようになった	.61	-.02	.42	.20	.04	.20
20	人との和を大事にするようになった	.53	.25	.12	.42	.13	.21
13	精神的にタフになった	.48	.15	.09	.06	.01	.46
25	いろいろな角度から物事を見るようになった	.47	.04	.02	.02	.39	.25
1	角がとれて丸くなった	.46	.00	-.04	.07	.32	.13
9	環境問題(大気汚染・食品公害など)に関心が増した	.00	.68	-.16	-.01	.20	-.04
3	日本や世界の将来について関心が増した	.23	.67	.02	.15	.16	-.01
22	伝統や文化の大切さを思うようになった	.09	.57	.02	.47	-.12	.21
35	自分の健康に気をつけるようになった	.10	.57	.37	-.01	.01	.11
11	長生きしなければと思うようになった	-.01	.50	.33	.01	-.08	.42
21	児童福祉や教育問題に関心をもつようになった	.10	.42	.20	.23	.07	.41
8	自分のほしいものなどが我慢できるようになった	.12	.38	.13	.04	.29	.27
34	情にもろくなった	.18	-.04	.72	.20	.20	-.16
17	自分がなくてはならない存在だと思ふようになった	.13	-.06	.63	.01	.07	.37
33	いろいろな人に支えられていると感じるようになった	.23	.23	.63	.09	-.01	.04
23	子どもへの関心が強くなった	.14	.18	.40	-.13	.21	.36
4	物事を運命だと受け入れるようになった	-.05	.05	.12	.69	-.03	-.18
28	人間の力を越えたものがあることを信じるようになった	.36	.10	-.08	.65	-.10	.13
10	運や巡りあわせを考えるようになった	.01	.14	.22	.60	.26	-.02
19	小さなことにくよくよしなくなった	-.07	.03	.04	.53	.27	.46
6	多少他の人と摩擦があっても自分の主義は通すようになった	.15	.12	-.10	-.03	.69	.04
32	自分の分をわきまえるようになった	.21	-.04	.42	.08	.65	.01
12	自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思うようになった	-.03	.36	.12	.20	.56	.05
31	考え方が柔軟になった	.12	.13	.24	.16	.53	.24
26	自分本意の考え方や行動をしなくなった	.35	.07	.29	-.07	.51	.25
7	他人に対して寛大になった	.46	.33	-.11	.10	.50	.11
30	妥協しなくなった	-.01	-.12	-.05	.42	.47	.34
24	目的に向かって頑張れるようになった	.40	-.02	-.11	.05	.22	.62
5	生きている張りが増した	.03	.33	.05	-.06	.09	.57
18	物事に積極的になった	.34	.03	.08	.31	.28	.41
29	目先のことより将来のことを考えて行動するようになった	.38	-.06	.11	.08	.07	.41
固 有 値		8.82	2.44	1.98	1.86	1.71	1.58
累 積 寄 与 率 (%)		25.2	32.2	37.9	43.2	48.1	52.6

父親の「親としての発達」項目得点については、父親の年齢群、母親の年齢群、家族構成、子どもの数、子どもの性別、の5つの要因による群間差はいずれも有意にならなかった。

次に母親の「親としての発達」をみるための6つの項目得点について検討を行った結果、何らかの群間差がみられた部分についてのみ表5にまとめて示した。全体の平均値をみると母親がもっとも「親になっての変化」を感じているのは「情緒的な絆の意識」であり、次いで「外界や自身への関心」「協調的な生き方」「前向きに生きる意欲」も高い値を示している。

「協調的な生き方」および「前向きに生きる意欲」については年齢、子ども数、子ども性別

表5 親としての発達6項目得点(母親)の群ごとの平均値

	全体の 平均値 (SD)	母親年齢群			子どもの数			子どもの性別			夫意識		夫評価		父 役 割		
		年齢 群1	年齢 群2	年齢 群3	一人	二人	三人 以上	男児 のみ	女児 のみ	男女 混合	L群	H群	L群	H群	下方 ズレ群	一致群	上方 ズレ群
協調的な生き方	2.91(.50)												2.79	3.03	(2.80	3.07	2.92)
外界や自身への関心	2.92(.51)	2.73	2.96	3.05	2.75	2.86	3.10	2.94	2.71	3.02			2.81	3.09	2.79	3.09	2.87
情緒的な絆の意識	3.21(.51)				2.99	3.32	3.22				2.97	3.29	3.13	3.40	(3.14	3.39	3.17)
運命などの受容	2.47(.58)	2.25	2.65	2.49				2.32	2.30	2.63					2.39	2.66	2.34
対人技能の発達	2.59(.47)							2.59	2.44	2.71					2.53	2.77	2.54
前向きに生きる意欲	2.88(.51)														2.73	3.05	2.85

群別の欄に数値が記入されているのは1要因分散分析の結果、 $p < .05$ で有意なF値が得られた場合のみ。
また()の数値は当該群の分散分析によって得られたF値の有意水準が、 $0.05 \leq p < .07$ であることを示す。

による群間の差がみられなかった。母親の年齢が高いこと、子どもの数が多いこと、子どもの性別も男女両方を経験すること(ここでは子ども数との混交を含んでいる)が、母親の「外界や自身への関心」を高める方向に関連していると考えられる。「情緒的な絆の意識」については、子どもの数との関連がみられた。一般的には、一人っ子の方がこうした傾向が高くなるのではないかと予測されるところであるが、むしろ反対の傾向が有意となった。年齢群による有意差はみられないので、母親の年齢が上がるとともに子どもの数も増える、という傾向に伴う現象とは考えにくい。母親の情緒的な感受性の発達を一般的な意味で「母性」と呼ぶならば、初子誕生とともにいわゆる「母性」が一時に目覚めるということではなく、「母性」は複数の子どもを生み育てる中で徐々に発達していくのではないかという視点の可能性を示唆する興味深い傾向といえる。

次に母親自身が親になっての変化を感じるその程度は、配偶者との関係によってどのように異なるのかを検討した。まず、配偶者である男性の「父親として」の役割評定との関連であるが、父親自身による「父親意識」の高低によっても、また母親による配偶者の「父親評価」の高低によっても、母親の「親となっての変化」のちがいはみられなかった。ところが、この両方の評定値のズレから構成された3群(表中「父役割」欄)による差を検討したところ、母親の親としての変化得点のほとんどすべてにおいて有意な群間差が検出された。分散分析後の多重比較(FisherのPLSDによる)の結果、一致群の値が他の2群よりも有意に高かった。

父親の「夫として」の自己評価の高低による群間差は、母親の「情緒的な絆の意識」1項目においてのみみられたが、母親自身による「夫評価」の高低による群間差では、「協調的な生き方」「外界や自身への関心」「情緒的な絆の意識」の3項目で有意差がみられた。

以上の結果から、母親の「親としての発達」感と関連している要因は、①父親役割に対する夫婦の見解がある程度一致していること、および、②母親自身が配偶者を「夫として」ある程度評価していること、の二つであることが示唆された。今後、詳細な検討を必要とするが、母親にとって配偶者が子育て上、同じ地平に立てるパートナーであること、夫婦という対の関係においてもよいパートナーであると実感できること、そうした条件のもとで多次元的な変化を経験していけるということかもしれない。

これに対して父親における「親としての発達」はどのように考えればよいだろうか。母親の因子分析の結果と比べても1因子しか抽出されず、少なくとも今回の調査項目に関しては1次元的な捉え方がなされていたといえる。全35項目の平均値を父親の「親としての発達」の項目

得点としたが、この値を用いた分析においても、父親群の質的な違いを検出できなかった。父親の「親になっての変化」という感覚が母親と比較すると未分化である可能性を示唆しているかもしれないし、あるいは父親の「親としての変化」を描き出すためには、もっと別の次元から項目を選び出し光をあてていく必要があるのかもしれない。

4. 「子どもに対する意識・態度」に関する検討

(1) 19項目の因子分析結果

父親、母親それぞれに因子分析を行った。どちらも固有値1.0以上の因子が6つ抽出されたが、各因子に対する項目のまとまりや因子負荷量、解釈可能性等を考慮した結果、どちらも4因子解を採用した。バリマックス回転後の因子負荷量を表6および表7に示したが、父親と母親とは、重なりを含みながらもやや異なった項目内容となっている。先行研究（大野・柏木1992）においては5因子構造を確認しているが、その項目内容ともやや異なっている。

父親においては第1因子から順に「子どもと共にある生活の重視」「子どもとの対等性重視」「親としての自信」「子育てからの逃避」、母親においては第1因子から順に「信頼で結ばれた親子関係の重視」「子どもは生き甲斐」「子どもとの親和性重視」「子どもの自立性尊重」と解釈された。

(2) 項目得点による検討

各因子上にまとまった項目の平均評定値を算出し、父親、母親それぞれについて4つずつの項目得点とした。年齢群、家族構成、子どもの数、子どもの性別などで構成された群間の差、

表6 「子育ての意識19項目」(父親) のバリマックス回転後の因子負荷量

項目番号	質 問 項 目	因子1	因子2	因子3	因子4
2	家に帰って来て子どもの顔を見るとほっとする	.77	-.10	.09	-.09
3	将来、子どもと共通の話題を多く持ちたいと思う	.76	.23	.07	-.10
13	将来、子どもと共通の趣味を楽しみたいと思う	.68	.18	-.01	-.03
16	できるかぎり一緒に出かけたり旅行をしたりしたいと思う	.66	.11	-.04	.01
4	子どもの考えはたとえ未熟なものであっても尊重してやりたいと思う	.65	.28	-.22	.05
11	子どもは自分と一緒にいて楽しいと感じていると思う	.60	.22	.01	-.26
7	子どもは自分の生きがいだと思う	.57	.19	.33	-.46
10	自分の体験したことをできるだけ伝えたいと思う	.57	-.16	.19	.40
12	成長して自分から離れていくのがさみしいと思う	.50	.19	.04	.09
9	子どもを一人前の大人として扱いたいと思う	.15	.76	.09	-.10
8	将来、友達のような親子でありたいと思う	.20	.69	.09	.10
15	将来、子どもは自分に対して隠し事はしないと思う	.09	.57	.08	.09
14	子どもとは何でも話せると思う	.49	.53	-.21	-.17
1	将来、子どもから尊敬されたいと思う	.34	.34	.71	.02
6	将来、子どもから頼りにされたいと思う	.51	.19	.66	.06
19	自分のような人間になってほしいと思う	-.03	.47	.55	.03
18	子どもから話しかけてくるより自分から話しかける方が多いと思う	.15	.11	-.32	.10
5	疲れているときは子どもどころではないと思う	-.21	.09	.02	.74
17	「好きなように生きなさい」と言いたいと思う	.28	.37	-.32	.51
固 有 値		5.62	1.81	1.60	1.17
累 積 寄 与 率 (%)		29.6	39.1	47.5	53.6

表7 「子育ての意識19項目」(母親) のバリマックス回転後の因子負荷量

項目番号	質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4
14	子どもとは何でも話せると思う	.84	.09	.07	.04
15	将来、子どもは自分に対して隠し事はしないと	.73	-.23	.22	.05
16	できるかぎり一緒に出かけたり旅行をしたり	.55	.43	.10	.02
19	自分のような人間になってほしいと	.54	.05	-.16	-.01
7	子どもは自分の生きがいだと思	.50	.37	.38	-.16
11	子どもは自分と一緒にいて楽しいと	.42	.40	.03	-.30
2	家に帰って来て子どもの顔を見るとほ	.06	.76	.02	-.01
4	子どもの考えはたとえ未熟なものであ	-.05	.68	.21	.28
5	疲れているときは子どもどころでは	-.15	-.54	.24	.03
8	将来、友達のような親子でありたい	.13	-.11	.69	.13
13	将来、子どもと共通の趣味を楽しみた	.37	.04	.61	-.02
3	将来、子どもと共通の話題を多く持	.01	.45	.55	.10
12	成長して自分から離れていくのがさ	.39	.23	.40	-.33
18	子どもから話しかけてくるより自分	-.14	-.04	.37	-.09
9	子どもを一人前の大人として扱いた	-.07	.05	.32	.60
17	「好きなように生きなさい」と言	-.02	.07	-.11	.60
10	自分の体験したことをできるだけ伝	.26	.25	.16	.50
6	将来、子どもから頼りにされたい	.27	.02	.47	-.51
1	将来、子どもから尊敬されたい	-.04	.17	.35	-.45
固 有 値		4.02	1.97	1.59	1.49
累 積 寄 与 率 (%)		21.2	31.6	40.0	47.9

表8 子育て意識4項目得点(父親・母親)の群ごとの平均値

	全体の平均値(SD)	父親年齢群			母親年齢群			父親意識		夫意識		父親評価		夫評価		父役割		
		年齢群1	年齢群2	年齢群3	年齢群1	年齢群2	年齢群3	L群	H群	L群	H群	L群	H群	H群	H群	下方スレ群	一致群	上方スレ群
父親	子どもと共にある生活の重視	3.23(.50)						3.07	3.34	2.90	3.33	2.99	3.42	3.00	3.33			
	子どもとの対等性重視	2.60(.61)	2.77	2.68	2.28	2.84	2.42	2.50		(2.34	2.65)			2.32	2.76			
	親としての自信	2.60(.57)									2.25	2.71						
	子育てからの逃避	2.84(.64)											(2.98	2.69)				
母親	信頼で結ばれた親子関係の重視	2.89(.47)				2.88	3.06	2.73								(2.79	2.87	3.04)
	子どもは生き甲斐	3.35(.42)									3.18	3.45				3.16	3.44	3.44
	子どもとの親和性重視	2.93(.53)	3.06	3.00	2.67	3.15	2.81	2.81		(2.62	2.91)			2.72	3.03	2.84	2.81	3.11
	子どもの自立性尊重	2.71(.44)																

群別の欄に数値が記入されているのは1要因分散分析の結果、 $p < .05$ で有意なF値が得られた場合のみ。また()の数値は当該群の分散分析によって得られたF値の有意水準が、 $0.05 \leq p < .09$ であることを示す。

および表1のように構成された各群間の差を検討した結果をまとめたのが表8である。

父親の子育て意識の中で最も高い平均評定値を示したのは「子どもと共にある生活の重視」であった。父親の年齢群や子どもの数等による群間差はみられなかったが、父親意識、夫意識、父親評価、夫評価の各群分けによる有意差がみられた。父親として、夫として、家庭内での役割意識が高いことや、それが母親にも評価されていることが、父親に「子どもと共にある生活」のよさを実感させることになるのであろう。

次に高かったのは第4因子上の2項目「疲れているときは子どもどころではない」「好きなように生きなさい、と言いたい」の平均評定値で、「子育てからの逃避」と解釈されたもので

ある。母親の因子分析においては、この2項目がまとまりをもって抽出されることはなく、「疲れているときは…」は第2因子「子どもは生き甲斐」の上に負の負荷量を示す形で含まれ、また「好きなように…」は第4因子「子どもの自立性尊重」の中に含まれる形であった。父親においてこの「子育てからの逃避」が因子としてまとまってきたことや、この2項目の平均値について群間差があまりみられず、かつ高い値を示すのは気になるところである。やや有意な傾向として捉えられた群間差は「父親評価」によるものであった。すなわち母親からの「父親として」の評価が低い群の方が高い群よりも「子育てからの逃避」得点が高い傾向が示された($t=1.71$, $p=.09$)。

「子どもとの対等性重視」においては、まず年齢群による差が有意であった。因子名としては母親の第3因子「親和性」に近い表現であるが、共通して含まれている項目は8「将来、友達のような親子…」のみである。母親の第3因子「親和性」においては、子どもとの距離をより縮めてぴったりとくっついていたい、という意味内容の項目が集まっているが、父親の第2因子「対等性」は、むしろ子どもと一定の距離を置いて「対等に」関わることを重視していると考えられる。父親の「対等性」、母親の「親和性」いずれについても両親それぞれの年齢群の効果が有意であったが、ここでは解釈上、意味のありそうな対を検討しておく。まず父親の「対等性」得点の父親年齢群による有意差であるが、多重比較(FisherのPLSDによる)の結果、年齢群3が他の2群と比べて有意に低い傾向が見いだされた。また母親の「親和性」について同様の分析を行ったところ、年齢群1が他の2群と比べて有意に高い傾向が見いだされた。さらに両得点とも、「夫意識」や「夫評価」との関連が伺われる。「夫として」の意識が高く、妻からもそのように評価される若い父親は、子どもと対等につきあうような関わりを重視するということがいえるだろう。さらに母親の年齢が若く、配偶者に「夫として」の高い評価を与える群は、子どもとの親和性を重視した関わりを求める傾向があるといえる。これは一面で望ましい傾向でもあるが、いわゆる「友だち親子」の危険をはらんだものともいえる。

その問題を示唆する傾向を示しているのが「父役割」における群間差である。すなわち父親の自己評価が妻からの評価とズレている場合(夫の父親としての意識のありようを妻が相当に評価していない、もしくは妻の評価とはかけはなれた夫の「父親として」の自意識過剰)、母親の「親和性」得点は有意に高い傾向が示されている。この「父役割」のズレは母親の第2因子「子どもは生き甲斐」とも関連している。この場合、夫の「父親として」の意識が妻の評価よりも下方にズレている(妻からの評価よりも低い自己評価しかもてない、あるいは父親の自己評価を越えて妻が高い評価を与えてしまう)場合、母親の「子どもは生き甲斐」得点が低くなる傾向がみられた。

IV おわりに

本研究は保育所に子どもを預けて働いている父親、母親を対象として、彼らが「親として」どのような変化を感じており、子どもとの関わりでどういった側面に喜びや生き甲斐を感じているのかをデータの上から探索的に描き出そうとしたものである。その際、父親と母親のちがいをみていくと同時に、夫婦という(あるいは父親-母親という)対の関係が、彼らの「変化」の感覚や子育ての意識に、どのように反映されるかという視点をとろうとした。今回、この対

の関係は非常に単純な評点の「ズレ」というものでしかなかったが、それでも今後の研究にとって示唆を与えると思われる結果がいくつか得られた。ここではこれらの示唆を次なる検討に進むための問題提起という形で提示しておきたい。

- ・女性（母親）においては「親として」の発達（パーソナリティ変化）が多次的に、かつ子育て経験とともに徐々に現れると考えてよいか。
- ・もし、そうであるとすると、男性（父親）においてそうした発達の変化が見えにくいのはなぜか。また男性においてのみ「子育てからの逃避」を意味する因子が抽出されたことと何らかの関係があるか。
- ・今回、女性（母親）においてみられた「親として」の変化は、男性の役割意識そのものではなく、夫婦間のズレ（男性の役割意識と女性の役割認知とのズレ）と関連していた。これをどのように考えればよいか。
- ・相対的に若い年齢層の親においては、とりわけ子どもとの「対等性」や「親和性」を重視する傾向がみられたが、このこと（育児の意識や態度）は子ども自身の発達とどのように関係していく可能性があるのか。
- ・今回「父親として」「夫として」という二つの役割意識を前提として調査を行ったが、そもそもこの二つの意識はどのような心理的内容を含み、どのようなちがいがあのか。とりわけ「父親として」の役割意識に関する夫婦の感覚のズレや一致、および「夫として」の役割に関する女性の側の認知が女性（母親）の育児意識と関連していたことを手がかりにして検討できるのではないか。

今後、以上の点をふまえた調査を実施するとともに、関連諸研究の結果との比較・検討も行っていきたい。

謝辞

本研究の調査を実施するにあたり、2保育所の職員の方々、保護者の方々の多大なご協力を得た。池田きみえ先生、河本美恵子先生はじめ関係各位に心から感謝いたします。

参考文献

1. 原ひろ子（1993）文化の中の父親。 柏木恵子（編著），父親の発達心理学—父性の現在とその周辺—（pp.152—177）。東京：川島書店
2. 肥後功一（1997）今、求められている育児・子育て支援—市・県の育児支援事業に参加して—。発達，第18巻第72号，56—63。
3. 柏木恵子・若松素子（1994）「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み。発達心理学研究，第5巻第1号，72—83。
4. 大野祥子・柏木恵子（1992）家庭における父親—父親の存在感の規定因—。発達研究，第8巻，129—154。

¹⁾ 島根県（平成8年5月）「島根県児童育成計画～しまねエンゼルプラン～」

²⁾ 平成6年12月18日付、大蔵・厚生・自治3大臣合意「緊急保育対策等5か年計画—当面の

緊急保育対策等を推進するための基本的考え方」

- 3) 文部省告示174号（平成10年12月14日）「幼稚園教育要領」。松江市においてはこれを「教育時間の延長」と通称している。
- 4) 本論文は内田崇「父親の発達に関する一研究～父親・母親の子育て意識の比較～」(平成10年度卒業研究、未発表)にかかる調査として1998年12月8日～21日の期間に実施された調査資料の一部を使用している。
- 5) 配布にあたっては、両親ともに記入することが困難な家庭等、個々の事情に応じ、保育所を通じて十分な配慮がなされた。
- 6) 荒木紀子「家事・育児分担に対する捉え方と性役割意識の関係についての一研究」(平成8年度卒業研究、未発表)
- 7) これら4つの評点についても、父親の年齢群、母親の年齢群、家族構成、子どもの数、子どもの性別の効果を検討したがいずれも有意な差がみられなかった。
- 8) このズレの値についても7)と同様に5つの要因の効果を検討したがいずれも有意な差がみられなかった。